様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年４月２２日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０２３４
研究課題名（和文）１８世紀後半のイギリスにおける擬似自伝体小説の研究
研究課題名（英文）A Study on the Pseudo-Autobiographical Novels in Later Eighteenth-Century Britain

研究代表者
内田　勝（UCHIDA MASARU）
岐阜大学・地域科学部・教授
研究者番号：00213447

研究成果の概要（和文）：
本研究では、１８世紀後半のイギリスにおける『ジョン・バンクル伝』や『トリストラム・シャンディ』などの擬似自伝体小説が、脱線が本筋を凌駕する構成、本文に挿入される他の様々なジャンルの文書、読者と直接会話を始める饒舌な作者といった、実験的でエキセントリックな語りの技法を開発することによって、新しい文学ジャンルである小説が近代的な自己意識を表現する方法を獲得するために、大いに貢献したことを示しました。

研究成果の概要（英文）：
In this research I showed how the pseudo-autobiographical novels in later eighteenth-century Britain, including *The Life of John Buncle, Esq.* and *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, greatly helped the novel, a new literary genre at the time, to establish a method of expressing the modern self-consciousness, by developing various experimental and eccentric narrative devices, such as digressions that are longer than the main story, documents of different genres inserted in the work, and the garrulous narrator who starts direct conversations with the reader.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：英文学

１．研究開始当初の背景

本研究で扱った「擬似自伝体小説」（pseudo-autobiographical novels）とは、単に架空の人物の自伝という設定で書かれた小説という意味ではありません。むしろ「自伝」という形式を借りて、本題である自分の人生の物語から脱線を繰り返しながら、

作者本人の思想や意見を漫然と語り続けるような小説を指しています。

18 世紀後半のイギリスにおける「擬似自伝体小説」の中で、世界文学の古典として扱われている有名な作品としては、ローレンス・スターン（Laurence Sterne, 1713–68）の『トリストラム・シャンディの生涯と意見』（*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, 1759–67）が挙げられます。しかし同時代のイギリスでは、この作品以前にも、多くの擬似自伝体小説が出版され、広く読まれていました。

私は、2004 年度～2005 年度に日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 C）を受けた研究「ジェイムズ・ラッキントンを中心とした 18 世紀末イギリス書籍商の研究」（研究課題番号 : 16520140）の研究過程で、主な研究対象とした書籍商ジェイムズ・ラッキントン（James Lackington, 1746–1815）が、あたかも擬似自伝体小説の語り手のように、脱線を繰り返しながら自らの思想や意見を漫然と語り続ける文体で自伝を執筆していることに興味を持ちました。ラッキントン自身は、自分の思想や文章にもっとも多大な影響を与えた書物として、トマス・エイモリー（Thomas Amory, 1691?–1788）による擬似自伝体小説『ジョン・バンクル伝』（*The Life of John Buncle*, 1756–66）を挙げています。

Michael Mascuch, *Origins of the Individualist Self: Autobiography and Self-Identity in England, 1591-1791* (Cambridge: Polity Press, 1997) は、17–18 世紀イギリスの、実在のさまざまな人物による自伝を取り上げ、その中でラッキントンの自伝『ジェイムズ・ラッキントン四十五年の半生の回想』（*Memoirs of the First Forty-Five Years of the Life of James Lackington*, 1791）を「イギリスで書かれた最初の近代個人主義的自伝」と位置づけています。

Mascuch の言うようにラッキントンの自伝が「イギリスで書かれた最初の近代個人主義的自伝」であるとすれば、そのような近代個人主義的な語り手の自意識を表現する文体を準備したのが、世紀中葉に出版された一連の擬似自伝体小説ではないかと考えました。

２．研究の目的

本研究の目的は、18 世紀後半のイギリスにおける擬似自伝体小説を精読することで、Mascuch の主張するような意味での「近代個人主義的な自我」（the modern individualist self）を表現する方法が、小説という新しい文学ジャンルの中で具体的にどのように形成されていったかを跡づけることです。

研究対象としては、主にトマス・エイモリーの小説『ジョン・バンクルの生涯』（1756–66）に焦点を当て、それに加えて同時代に書かれた、人間以外の物や動物を主人公とする擬似自伝体小説である “it-narratives” というサブジャンルに属する一連の作品にも注目しました。またそれらの作品を、最も重要な擬似自伝体小説であるローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディの生涯と意見』（1759–67）との影響関係の中で捉えることを目指しました。

３．研究の方法

今回の研究にあたって私は、一般的な文学研究の方法を用いました。すなわち当該テーマに関連する一次資料（18 世紀後半のイギリスにおける擬似自伝体小説）および二次資料（擬似自伝体小説に関する先行研究）を集め、それらを読んで要点を整理し、自分なりの考えをまとめました。研究は私個人が単独で行ない、研究分担者・連携研究者・研究協力者はおりません。研究のために使用した機器は、インターネットに接続されたパーソナル・コンピュータ、およびその周辺機器です。

具体的な作業としては、今回の主な研究対象である『ジョン・バンクルの生涯』を精読し、その思想史的・文化史的背景を調べました。また、Thomas Keymer, *Sterne, the Moderns, and the Novel* (Oxford: Oxford University Press, 2002) や Rene Bosch, *Labyrinth of Digressions: Tristram Shandy as Perceived and Influenced by Sterne's Early Imitators* (Amsterdam: Editions Rodopi, 2007) のように、『トリストラム・シャンディの生涯と意見』が同時代の擬似自伝体小説とどのような影響を与え合っていたかを論じた先行研究から出発し、そこで言及された小説や研究論文を集めて読む作業を行いました。

４．研究成果

(1) 2010 年度には、擬似自伝体小説の作家であるローレンス・スターンを研究するための入門書、Thomas Keymer, ed., *The Cambridge Companion to Laurence Sterne* (Cambridge University Press, 2009) の書評（『英文学研究　支部統合号』3［2011］: 329–35）を発表しました。

(2) 2011 年度には、擬似自伝体小説のサブジャンルである、人間以外の物を主人公とする

“it-narrative” に着目し、論文「モノが語る物語――『黒外套の冒険』とその他の it-narratives」を発表しました。

［論文要旨］“it-narrative” とは、18 世紀後半のイギリスで流行した小説のサブジャンルで、人間以外の物や金銭や動物を主人公とする。“it-narrative” においては、(1) モノの力によって階層を超えて流動するヒト、(2) 高級品から廃棄物へと徐々に価値を下落させながら流動するモノ、(3) ヒトとモノに流動性を与えるために流動するカネ、という三者が動き回っている。ヒトはみな、社会階層の一員であることによってのみ存在意義を規定される、無個性な存在である。モノやカネは都市の内部を嬉々としてさまよい、その過程で、ヒトどうしの関係の裏に働く搾取・暴力・破壊といった、都市のメカニズムの暗部を目撃する。また、本として売られる “it-narrative” はそれ自体が商品というモノであり、使い捨て商品としてすぐに消費者に売れなければ存在意義がない。登場人物自身が、そうした事情を自覚した自己言及的な語りを行なうのも “it-narrative” の特徴である。

(3) 2012 年度には、エイモリーの『ジョン・バンクル伝』を中心的に扱った論文「絶景と美女と過剰な脱線――トマス・エイモリー『ジョン・バンクル伝』について」を発表しました。

［論文要旨］トマス・エイモリーの『ジョン・バンクル伝』は、数年後に出版されたローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』と同様、本筋を量的にはるかに上回る博学な脱線を特徴とする。当時の小説は流行に乗って消費される使い捨ての商品であり、移り気な流行に左右される市場では、つねに新奇なものが求められた。作家はより斬新なエキセントリックさを演出して人目を引き、本を売らねばならない。そんな中で『ジョン・バンクル伝』が打ち出した新機軸は、本筋からの脱線を、他の作者が決してやらないくらい過剰に長引かせ、そこに百科全書的な、当時の人々の知的活動の全範囲を覆ってしまうほど膨大な情報をぶち込むことだった。過剰な脱線によって百科全書的な知の全体性の幻想を作り出す『ジョン・バンクル伝』の斬新さを再発見することは、『トリストラム・シャンディ』および 1750 年代イギリス小説全般に対するこれまでの見方を、一変させる可能性を秘めている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 内田勝「絶景と美女と過剰な脱線――トマス・エイモリー『ジョン・バンクル伝』について」『岐阜大学地域科学部研究報告』32 (2013)：1-18. 査読有.

② 内田勝「モノが語る物語 ――『黒外套の冒険』とその他の it-narratives」『岐阜大学地域科学部研究報告』30 (2012)：15-36. 査読有.

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

①「モノが語る物語 ――『黒外套の冒険』とその他の it-narratives」（同名論文の HTML 版）
<http://www1.gifu-u.ac.jp/~masaru/uchida/blackcoat12.html>

② 「絶景と美女と過剰な脱線――トマス・エイモリー『ジョン・バンクル伝』について」（同名論文の HTML 版）
<http://www1.gifu-u.ac.jp/~masaru/uchida/buncle13.html>

６．研究組織

(1)研究代表者
内田　勝（UCHIDA MASARU）
岐阜大学・地域科学部・教授
研究者番号：00213447

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：